

## 2. いきいきと課題に取り組む子

ダウン症のT. M児は2年生の男児。1年生の時は日常生活全般で行動が後れがちで、学校生活の中で多くの援助を要しながら生活していた。しかし、自分の好きな遊びや学習に対してはかなり積極的に集中して取り組むことができだしていた。本年度は、本児が積極的に集中して取り組むことができることを増やし、与えられた課題に対しても意欲的に取り組んでくれることを目標としてこのテーマを設定した。

### (1) T児の実態

氏名 T. M (男) 昭和55年5月22日生 (8歳)

発育の様子

身長 114.2cm 体重18.6kg (63.4月現在)

とかなり小さく幼稚園の年中組程度。視力検査はできていないが観察によるとかなり見にくいと思われる。

障害名 ダウン症候群 (21トリソミー型)

1歳頃県立中央病院・児童相談所にて診断される。

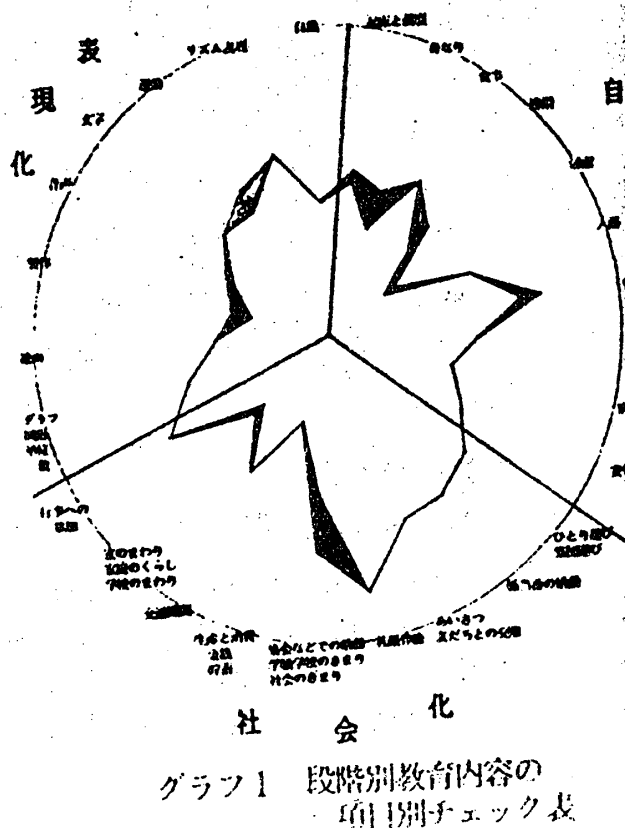
●右の図は生活年齢8歳のT. M児が獲得している力を本校の段階別教育内容を更に細分化した項目でチェックした実態である。

周囲の円が小学部でマスターさせたいと考えているラインであるから2年としてはほぼ本校の教育内容を身につけている子と考えられる。

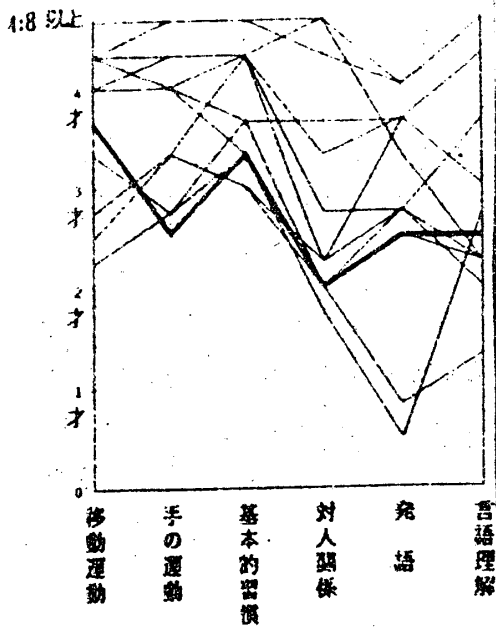
いきいきと課題に取り組んでいった結果このグラフが周囲にどんどん広がっていくと考えている。

### ●発達検査における実態

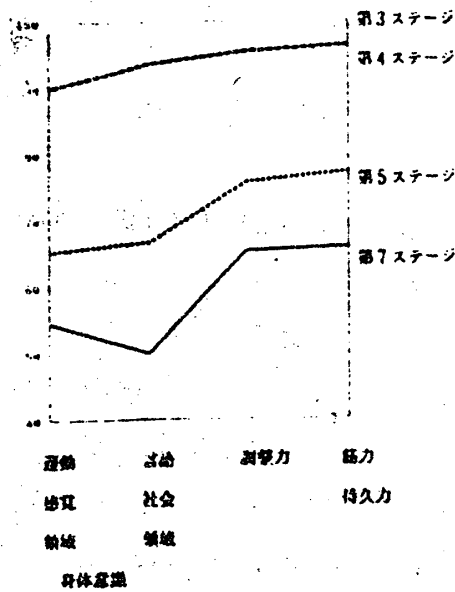
遠城寺式乳幼児においてはほぼ2.5～3.5歳。MEPAでは第4ステージ (1歳半～3歳) を通過中の子ども



ものであることが次の二つのグラフから分かる。



〔小学部全体の中で本児の位置〕



〔MEPAの各ステージの通過率〕

## (2) 指導の方針

このようなT児に対して以下のような力を付けていきたいと考えた。

- ①衣服の着脱の技能。(スナップを止める。進んで着替えに取り掛かる。)
- ②～したい、～のつもりを先生に言葉や動作で伝えられる表現力。

この力をつけていくために

- ア. 動きの基本を身につけながら、動くことを楽しむこと。
- イ. 1語文を増やし、自分を表現すること。
- ウ. 集中力を付けていくこと。

の3つを考えた。このうち、アについては

自我を大切に、模倣を手段として見立てる力をしっかりつけながら指導していくことによって身体像や身体図式が得られ感覚を統合できるからだになっていく。

という仮説をたて、小学部の研究と同じ構想の中で指導していく。

イについては生活のあらゆる場面を通して、ウについてはまず本児の好きなことに對してそしてそれを広げていくという方針をたてた。

## (3) 実践例

- ①. 動きの基本を身につけながら、動くことを楽しむために

ボディチェックから探ってみると次のような問題点が見つかった。

- 足の指がほとんど使われていない。そのため、地面を蹴って歩く正常な歩行ができていない・かかとを上げることができない等の問題が起こっている。
- 筋力（腹筋・背筋力）がほとんどなくいわば赤ちゃんの身体である。
- 皮膚（特に手足）が極端に弱い。風邪をひきやすい。

そこで以下のような場面で個別の配慮を加えながら指導してきた。

### ●リズム・サーキット

#### ・うさぎになって跳ぶ

自分を兎に見立てて耳を手で耳を作ったが、まだ2つのことはできないので耳を作ったままとぶことはできなかった。リズムは感じているが体力からいって連続してとぶことはできない。終了感はつかんでいるので最後の部分は大きく跳べた。声かけをしながら跳ばせた。

#### ・とびばこからとび降りる（40センチ）

構えは自分でつくっているのだから、まだ踏み切ることができない。「仮面ライダーだよ。」というような声かけで促すと時々ではあるがとべる時もある。片手を少し持ち援助する、自分でしゃがんで下りるといふ両方の方法をとった。

#### ・トランポリンをとぶ

#### ・フープをトン・パーでとぶ

トン・パー、トン・パーというような連続した動きではなく、自分のリズムである。パーと開くことはできないか前から一緒にすればトンと足を閉じることが模倣によってできる。

### ●朝の会・合同体育でのどんぐり体操

・どんぐり体操は幼児向けの既成の体操である。とぶ活動もそのなかに多くは行っている。2学期に入って1組では朝の会にこの体操を取り入れた。

この間の手立てとしては、一緒に走る・手を上げるところでは手を持ってするという方法をとった。しかし、興味や関心からいってもこれまでの経過からいっても待つことができるという確信を持っていたので少しだけ刺激してみるといった方法をとった。その結果1ヵ月後には跳べるようになり楽しんでリズムカルに跳んだ。以後、3月まで朝の会にどんぐり体操を続けている。

### ●抽出養護・訓練

抽出養護は非常勤講師の田尻先生にお預けしている。

トランポリン・ブランコ等の遊具・ジャンボ積み木登り・スケーターボード等いろいろな道具を使いながら楽しんで行われた。始めは全く手を出さず黙って見

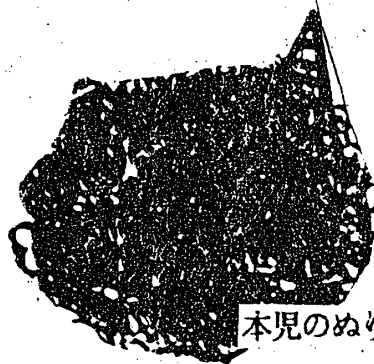
ているだけだが1～2回後には自分で納得し参加するようになった。

② 集中力をつけていくこと

好きなことにできるだけ長い時間取り組めるように環境整備を心がけた。

例えば、砂遊び・ままごと等の一人遊び、先生と本を読む等の人とのかかわりを持った遊び等。そのことによって、ぬりえ

(右の絵) や自由画等に20～30分も取り組めるようになった。このような本児の変容が1年生からの課題であったスナップどめに現れてきた。以下1年からの指導の様子である。



本児のぬりえ (1989.2)

段階	時期	目標	手立て
第1段階	1年生1学期	スナップの存在を知る。	手を持って止めさせた
第2段階	1年生2学期 3学期	とめる(パチンと音がする)ことを知る。	片手で自分の力でとめる。 スナップ使用の玩具で遊ぶ。
第3段階	2年生	両手でとめる 合わせてとめる	見ることに注意を促す

11月にはスナップが全く一人で止めることができるようになった。

(4) 考察と今後の課題

○本児の場合1時間の指導場面を訓練的に組み立てていくことが難しい子であるので本児の目標を常に念頭において生活の中で目標を達成する機会をみのがさないで指導していくことが必要であった。

○指示的なこと・不必要な援助は避け、やる気になるまで待つというのは一見消極的な方法ではあるが本児にとって理解に要する時間として大切で且つ効果的なやり方であった。

○サーキットのうさぎではなかなかとべない本児だが、どんぐり体操のなかではとべるという現象が起こっている。これは、動機・本人の要求、跳ぶ時間的距離・速度等の問題が考えられる。いずれにしても本児にとってこのような音楽を取り入れていくことは大変効果的だと考えられる。

○基本の運動をもっと身につけさせ、動くことに自信を持たせること、それによってもっといろいろな動きを楽しめるようにしていくことが今後の課題である。この自信が本校の教育内容のクラブを広げることになると考えている。(倉 真理子)